

## 無常性の克服

——『神の不変性』を読む——

山下秀智

## 一 無常性と我意

諸行無常ということは、我々日本人にとっても馴染みの深い言葉である。無常とは、サンスクリット語の *anitya* であり、それは永続的・固定的・不壊を意味する *nitya* (ニトヤ) に否定の接頭詞 *ni* を付けて否定したものである。常に変化し流動している現実世界の姿をこのような言葉で表現している。古代ギリシャの哲人ヘラクレイトスも「万物は流転する」と言っていることからしても、一切が常に変化しているということは、古今を問わず人間の実感として、その真理性をもっていえると思われる。キエルケゴールは壊れやすいもの、腐りやすいもの、墮落しやすいものという表現で無常な事物を表現しているが、仏教用語に近い感覚と言えよう。

まずは、キエルケゴール自身の言葉を引用しよう。「聴衆者諸君、今君は聖句が朗読されるのを聞いた。今その反対のこと、すなわち時間的、この世的な物事の可変性や人間達の可変性を考えることは、何と当然なことであるう！一切が過ぎ行くもの (Forrankelighed) であり、人間が、そう、聴衆者たる君も変化するものである」ということは、何と意気消沈することであり、心身を疲労させることである<sup>(1)</sup>。

キエルケゴールがその最後に記した談話は『神の不変性』と題され、そこには神の不変性、就中「愛において不変なる者」「無限の愛の内で動かされる者」である神について語られているが、その一方で強調されるのは、やはりこの世の有限性であり、無常性である。そして筆者が注目したいのは、そのような無常性が、何よりも人間の我意に根拠をもつと述べている点である。

もし君が彼のこの不変性を、彼の欲するが如く、君の福利のために、君の永遠の福利のために奉仕させるなら、又もし君が、君の我意 (Eigenschaft) (そしてこれは可変性が外部からである以上に、ここから本来現われてくるところのものである) が死に絶えるように教育されるなら、早いほど一層よい。何も君の助けにはならない。善についてであるが、悪についてであるが、君がなさねばならないのである (*ibid.*, S. 264.)。

この前後に、キエルケゴールは人間存在の特性を「不安定」「可変性」「移り気」「我意」の四つの言葉で表現している (Ustädighed, Foranderlighed, Lume, Egenrådighed)。そして、「この特性」も、仏教用語で言えば「諸行無常」の根拠であるとしているのである。それ故、無常性の克服には我意が死に絶えなければならないのである。「この主観に無常性の根拠を置き、永遠の世界に到達するには、我意が否定されねばならないとするのは、まさしく唯識思想と軌を一にする考えであると見えよう) 唯識思想と並んで、同時期に如来威の思想も生起したが、特に『大乘起信論』が「衆生心」に大乘の法を置いていることなど、同様な観点から注目すべきである。そこでは人間のごく普通の心に仏法そのものが主体化されている。なお、我意といふ言葉によつて、筆者は思惑(思棼)をもって生きる人間に必然的に随伴する自己中心性を考えている。それは単に意識レベルのみなら

ず、無意識のレベルにおいても適用されるものであって、唯識で言う末那識 (manas) に相当するものである。

かくして更に「もし君が神の不変性によって不安定と可変性と移り気と我意を断念するように教育されるなら、その時君は神の不変性の中に常に一層平安にそしてますます至福に憩つのである」( *ibid.*, s. 264.) とも言われるのである。

## 二 我意の死滅は神の方から

今、「君が神の不変性によって……我意を断念するように教育されるなら」という一文を引用した。この表現は何気ない表現であるが、我意が人間存在の方から断念されることにはならないということを表現している。我意は神の不変性によって断ち切られるという側面を本質的にもっているのである。筆者はここに他力思想を見て取る。そしてこのような表現は、この書の始めから一貫している。

汝、愛において不変なる者よ、汝は我々の福利のために自らを変えしめることはない。

我々は我々自身の安楽を欲し得ますように、そして、汝の不変性によって、無条件の

(絶対的な) 服従の内に安らぎを見出だし、汝の不変性の内で安らぐように、我々が教

育られますように。 ( *ibid.*, s. 255.)

ここには、我々人間の利益、福利のために神は自らを変えないこと、むしろ変わるべきは人間の方であり、しかもその変化は人間の思惑 (思忒) からは決して生じないことが言われている。神の

不変性にぶつかることによって、又その不変性への無条件の服従によって、人間の変化というものが起こるのである。神の方は決して変化するのではない。

「ああ、汝、無限の愛の内で汝は動かされる。そして又この我々の祈りも汝を動かして、汝がこれを祝福し、かくしてこの祈りが、祈る者をして汝の不変の意志との一致の内で変化せしめ給うように。」(ibid.)といわれる。キエルケゴールは最初のこの祈りについて、それがいかにささやかなものであっても、神の意志と一つになるように、祈る者を変えるようにと、祈っているのである。神の意志と自らの意志が一致するという表現は、この作品において数多く見られるが、それこそキリスト者における信仰の成就といえよう。この神の意志との意志疎通を神は常に要請されているのである。

何よりもまず第一に、君は神と意志を疎通しているか、君は理解するようになつたく  
真剣に熟慮し、誠実に努力しているか、……そして君がそれに努力すべきであるとい  
うことが(君と同様にすべての人間に関しても同様に)、神の永遠に不変な御意志なの  
である(ibid., S. 259.)

無常性の克服は我意の死滅において成就するが、その我意の死滅は神の不変な意志との合致の要  
請を真剣に(Alvor)受けつめるうちに可能となるのである。

## 三神からの促しと人間の躓き

神（父）は完全な賜物を贈ること以外には考えない。さらには自ら来たつてこの賜物を授けようとするのである。

最も親切な存在者、愛そのものを考えてみよ。この存在が私を指して賜物を選んだのであり、そしてこの賜物は善きものであり完全なものである。その存在が来たつて私にこの賜物を授けよう（skjenke）とする——そこに他の人間が居合わせて、彼は私に忠告して言う、君、そこで柔和（柔軟）にしようではないか、と（*ibid.*, s. 257）。

不変な愛の存在が、私に向かつてただただ善であり、完全である賜物を与えようとしている。しかし、人間はそのような場合に柔和にはならず、むしろ憤怒する場合すらあるのである。

古代における一人の異教徒、ただ一人の人間、素朴な賢者が嘆いたことは、しばしば彼が次のことを経験したことである。すなわち、彼が一人の人間に一層善い知識を齎らすために、つまり彼に福利を為そうとして、彼から一、二の愚劣さを取り除こうとすると、相手が非常に怒ることがあり、この素朴な者は半ば冗談半ば真剣に言っているのだが、まさしく彼に噛み付こうとしたというのである（*ibid.*）。

この文における異教徒は勿論ソクラテスであるが、いつも変わらず、善き・完全なものを与えようとする者に人間は躓き、憤怒すらするのである。この辺りの機微については、例えば『法華経』なども素晴らしい比喻を展開している。それは『法華経』「信解品」に説かれている「長者窮子の比

「諭」である。簡単にその内容を記すならば、幼い頃に家出した息子が、やがて成人して、しかも乞食となつて我が家とも知らず長者の家の近くを徘徊する。わが子と知つた長者は勢い込んで家人に子供を追わせるが、息子は何のことも分からず、不安に駆られ、逃げ去ろうとする。そこで今度はまず一番下の雇人として雇つて、次第に重く用いて、やがて最後に実の子であることを打ち明け、全財産を与えるのである。一切の善きものを与えようとした時、子供はむしろ躓くのであつて、そこに、特有な伝達方便が必要となるのである。絶対の真理は、相対者である人間にとつては、躓きの対象であり、憤怒の対象である。このことについては又、『キリスト教への修練』が見事な筆致で描いていることは周知のとおりである。

救いを前にして躓くのが人間であるとするなら、信仰は柔和（柔軟心）（Sagmofighed）において成就するといえよう。キエルケゴールも繰り返しこの作品において、柔和であることの重要性を説いている。これは仏教で言えば、生ける現実・事実をありのままに受けとめるところに成立する信心の真相に他ならない。キリスト教においても、柔和こそ神の愛の受容、或いは神の意志との合致（信仰）に欠かせないものと言えよう。

因みに曇鸞は『論註』の中で次のように述べている。『柔軟心』といふは、いはく、広略の止観相順し、修行して不二の心を成せるなり。止と観とを均等に行じて、驕ぶこともなく沈むこともなく、諸法実相があるがままに了知する心こそ、柔軟心であり、それは人生のまことの姿に随順して逆らふことのない心なのである。（『教行信証』証巻）。

神が我々に対して最も神益を与えようと欲する時に、我々は時として最も怒り狂つのである。実際、我々人間が本当に我々自身の福利を知り、最深の意味において本当に我々

自身の福利を欲するなら、この関係において柔和であれという如何なる勧告も必要ではなかったであろう。しかし我々人間は（誰がそのことを、自らの経験において確かめなかったことがあるう！）、所詮神との関係において子供のようなものである（*ibid.*）。

このことは又、使徒と凡人の違いとしても説かれている。使徒にとっては、神の不変性の思想はただただ平安を伴うが、人間にとつては（思惑（思忖）存在にとつては）、憤怒の対象、躓きの対象になるのである。自分に都合のよい不変性は賛同するが、そうでない場合は、貪・瞋・痴となるからである。

#### 四聖句に即して

キエルケゴールがこの書で引用している聖句はヤコブ書第一章、第一七節 一一節である。キエルケゴールの言葉でそれを引用しておこう。

凡ての善き賜物と凡ての全き賜物とは、上より、諸々の光の父より降るなり。父に於いてはいかなる変化も回転の影も無き者なり。父は、我々を父の被造物の初穂の如きものたらしめんとして、御旨のままに、真理の言葉によつて我々を生み給うたのである。それゆえに我が愛する兄弟達よ、いかなる人であっても聞くに速やかに、しかし語るに遅く、怒るに遅くあれ。何となれば人の怒りは、神の前に正義であるものを行なわな

いのだから。それ故凡ての汚れと凡ての悪意の残滓を捨て去り、柔軟に、あなたに植え

付けられ、又あなたの魂を祝福されたものたらしめる力をもつ言葉を受け取りなさい。

この引用を為した後で、キエルケゴールは「聞くに速やかに」「語るに遅く」「怒るに遅く」ということを解釈している。ここでは *snar-langsom* という言葉が対比されている。まず「聞くに速やかに」を考えてみよう。聞くとは、我々一人一人の内に植え込まれている（唯識で言う「依附」）言葉を聞くのである。聞法ということは親鸞にとっても重要なことであるが、この「聞く」に必要なことは、ただ一つ「柔軟」であること、素直であることである。私の言葉で言うなら、思惑（思杵）を破つてということである（そしてこの「破つて」が生起する時には、聞くことと同時に、思惑（思杵）の根本である我意が自覚されているはずである）。その時には、直ちに御言葉は、我が身に届くのである。

次には「語るに遅く」と言われる。「なぜなら我々人間は、とりわけこれとの関連において、又とりわけ素早く為すおしゃべりというものは、しばしば善き又完全な賜物を、余り善くはなく完全でもない賜物にするのに役立つだけだからである」(*ibid.*, S. 256) とキエルケゴールは述べている。私の言葉で言うなら、「聞く」が一旦思惑（思杵）に取り込まれてから「語られる」なら、最早それは人間の思いに汚染されてしまっており、余程熟慮しない限り、柔軟な「聞く」の瞬間（刹那）に到達しないからである。

又「怒るに遅く」と言われる。「我々は賜物が我々にとって善きもの完全なものに思われない時、怒るべきではない」とキエルケゴールは述べている。これも「我々にとって」が一枚噛んだ途端に、真の賜物には出会えないのであって、そうだとすれば、偽りの賜物について怒るといふことは、最早人間の責任であって、徒に怒るな！ という勧告が為されねばならないのである。この聖

句を、仏教の立場から見れば、法に背反する時に生じる貪・瞋・痴の煩惱として解釈することも十分に可能であろう。

### 五神の不変性に遭遇する時の二つの可能性——畏怖と解放

この作品は、大きく二つの部分に分かれている。それは第一版ではゴシックとゲシュペルトで明記され、第三版ではイタリックで明記されている。そしてその二部分が始まる直前に次のような文がある。

我々は次のことを忘れないようにしなむ。即ち使徒にとつてこのようであるということ  
は、使徒が使徒であるということにその理由があるということ、又使徒は既に久しく  
無条件の恭順の内に神の不変性へ全く自己を委ねていたのだということ、又使徒は出  
発点に立っていたのではなく、むしろ道、狭いがしかし又善き道の終わりに立ってい  
たのだということ、この道を使徒はあらゆる事を断念して選び、ますます強い歩調を  
以て永遠性に向かって急ぎながら、後を顧みることなく不変にこの道に従っていたの  
だということ、を、これに反して、我々は未だ初心者に過ぎず、訓育の下にある。我々  
においては神の不変性は又、別の側面から見られねばならない。そして我々がこの事  
を忘れるなら、我々は使徒の崇高さを妄りに用いることの危険を容易に冒すのである

(*ibid.*, S. 257.)

ここでは、非常に格調高くキエルケゴールは使徒の位置を讃嘆している。そして我々と使徒との質的な相違を述べている。我々は未だ初心者であり、未だ非自由であり、これから導き行かれる者である。これから一切を断念しなければならず、これから否定の道を辿らねばならないのである。このように述べて、次にキエルケゴールは、真理への道行きの手前に立つ人間の状況を次のように述べる。これはいわば善導大師の二河白道の直前に立つ旅人の状況と軌を一にしている。

かくして我々は、可能なら驚愕（恐怖）の内に、又安堵（安心）の内に、汝 不変者に  
ついて、或いは汝の不変性について語らうと思つ（*ibid.*, S. 258）。

ここから可能なら二つの精神状態の内、神と神の不変性について語るといっているのである。これは矛盾した状態である。一つは、神と神の不変性は我々を畏怖させるものである。しかし同時に真に解放を与えるものなのである。ルドルフ・オットーの又ミノーゼの概念に通じる絶対者の属性がここで表現されているとも考えられる。又、畏怖と解放は順序から言えば、畏怖が先立つものである。真理に直面する者はまず驚愕するのである。それは余りにも世間常識とは質的にかけ離れたものだからである。しかし思惑（思忖）の内、さまざまに展開する煩惱世界を真に解脱させるものも、この絶対的真理の他にはないのである。

## 六 畏怖の対象としての神の不変性

神は不変に自らの意志との意志疎通を、人間に要請されている。それは無常性を克服して永遠に目覚めよ、ということである。人間はこの世の可変性を嘆くのであるが、それでは真剣に神の不

変性を希求しているかという点、そうではない。「君は漫然と日を送っていて、こんなことには思いも及ばないのだろうか」と、キエルケゴールは日常性に埋没している普通人の「空過」(『浄土論』<sup>3)</sup>)の有り様を厳しく問いたです。日常の在り方がどんなに悲惨な在り方であるかは、日常性からは分からない。しかし、遅かれ早かれ (tidigt eller sildigt) 人間は神の不变性に遭遇し、これまでの悲惨を回顧せざるを得ないのである。

遅かれ早かれ、いつかはこの不变の意志と衝突しなければならぬ。この不变の意志は、君の福利を欲したが故に、君がこれを熟慮すべきことを欲したのであり、この不变の意志は、もし君が別の仕方ですれに衝突するならば、君を打ち砕くに違いない。<sup>4)</sup>

さて次の段階であるが、ともかく神と意志疎通している君、君は又神と良好に付き合っているのなら、君の意志は君の意志でありながら、又無条件に(絶対に)神の意志なのである。君の諸々の願い、君の二一つの願いが彼の命令であり、君の諸々の願い、最初にして最後の思いが神の思いなのである。さもなければ、神が不变であり、永遠に不变であるということは恐るべきことである。(ibid.)

道元の自己の概念は、周知の如く「仏道とは自己をならぶなり。自己をならぶといふは自己をわするなり。自己をわするといふは方法に証せらるるなり」(現成公案<sup>5)</sup>)という言葉によく表現されているが、このキエルケゴールの文章と通ずるものがある。自我が破れて、方法の意志が己れの意志となるところに、真の自己が成立するのである。もし、そうした事態が起こらないなら、方法は、自我に衝突し、打ち砕くであろう。それは畏怖すべき対象となるであろう。しかし、

「次の段階」として、万法に証せらるるなら、自己の願い、自己の思いは万法と一つになるのである。このことは一見違った宗派に見えよつとも、親鸞の信心にも通じるものがある。本願・名号の呼び声が届く一刹那に、すなわち聞信の一念に、私の願いは仏の願いとなり、そこに願作仏心・度衆生心が成立するのである。

以上を一言で言えば、思惑（思杵）で生きる人間の在り方と神と意志疎通している人間の間には、その人間の生死を分けるような、その人間の存在を打ち砕くような質的な差異があるということである。このことをこの後すぐに、キエルケゴールは特に時間の地平から問題にしようとしている。

ところで永遠の不变者、彼にとっては千年は一日の如しである。ああ、これすら言い足りず、彼にとっては千年は一刹那のような（some time）ものである。実際彼にとつて本来それは無かつたも同然である。——もし君が「汝為すべし」と彼が欲するのは違った道を、ほんのわずかでも行こうとするなら、それは恐るべきことなのだ！ 本当に、もし君の、又私の、又これら無数の人達の意志が神の意志と全く合致しない場合、即ちそれは外部のいわゆる現実世界の忙しさの中で最もうまくいっている場合でもあるのだが、神は本来何らの気付きの印も与えられない。或いはむしろ正直な者がいて——もしそのような者がいるとして！——彼がこの世界、聖書のいうように、悪の内に存するこの世界を観察する場合、神が何らの気付きの印も与えられないということに意気消沈せざるを得ないであろう。事態はそのような具合なのだ。<sup>6)</sup>

人間の意志と神の意志が全く合致しない場合、むしろ人間は現実世界が（それは虚構の現実には）ぎないが（最高にうまくいっていると思ひ込むのである。しかし、人間は自らの思惑（思杵）の内

で、善悪を思つのであるが、神はそのことに全く無頓着である。いわゆる正義の人はがっかりするであろうとキエルケゴールは言っている。

人間の現実の喧騒に全く神は無頓着（絶対的無関心）なのである。そしてそのことは恐ろしさを軽減するどころか、むしろその恐怖の有り様を一層深刻なものにするのである。強者が強情な者を打ち砕き、破滅させることが恐ろしいことではない。神が侮られず裁きの時期には破滅的に人類に臨むということも、最も恐ろしいことではない。そのようなことは人間的に言えることに過ぎない。永遠の不変な神の裁きとは、そうした地平を質的に超越しているのである。神は全く静かに見ているだけであり、悪が蔓延し善良な者まで暴力に訴えて善を為そうとするような事態があつても、ただただ静かにみているのである。このことこそ最も恐ろしいことなのである、とキエルケゴールは言う。ここには『カラマゾフの兄弟』におけるゾシマ長老の問題が提出されている。神の沈黙は絶対的な壁であつて、その壁にぶつかつて人間の思惑（思忒）は粉碎される。ここには又、ヨブの絶望の問題も関連するであろう。人間有為の世界が、如何に華麗に展開しようとも、それは無為の世界とは無関係である。或いは無関係という形で恐ろしい関係を保っているのである。道元は只管打坐ということを絶対的な行としたが、それは又「無為の妙術」と表現されている。有為による煩惱世界の恐ろしさを知っている言葉である。

人間は、時間を自らの思惑（思忒）によつて意味付ける。しかし、時間は神が与えるものである。「彼は時間を与える」（*ibid.*, S. 261.）とキエルケゴールは表現している。人間的に意味付けされた時間のみで物事を量ることこそ、人間の軽率である。罪責と罰との関係も、人間は軽率に考える。その内正義の概念も変わるであろうと考え、時の経過の内に、忘却が起こり、罰も忘れてしまう。

変化するのは人間の方であつて、その変化する意味付けによつて、永遠を忘れますますます不遜になつていく。しかし、そのような意味付けとは全く違つた永遠の尺度をもつて神は、一切を静かに見ている。マクロからミクロまで。

彼は現に存すると共に永遠に不変であり (baade er han til, og han er evig uforanderlig)

そして彼の無限の偉大さは、まさしく彼が最も微細なものをすら見て取り、最も微細なものすら覚えているという偉大さだからである (ibid., S. 261.)

### 七人間の心——レギーネとの関係の清算

キエルケゴールは、この作品において、レギーネとの関係も総括している。少し長くなるがその箇所を引用しよう。

人間と人間との関係において、しばしば変化することについて嘆かれる。ある者は他の者に向かつてお前は変わったと嘆く。しかし、人間と人間との間に於いてすら、時としてある者の変わらないことが悩みの種になるようなことがある。恐らく一方が他の人間に自分自身について打ち明けたということがあるかも知れない。彼が述べたのは、少し子供じみた悪意のないものであつたかも知れない。しかし事情はもつと真剣なものであつたかも知れない。すなわち、愚かで軽薄な心が彼の熱狂(熱意)について、彼の感情の持続性(堅さ)について、この世における彼の意欲(意志)について、高い調子で語るように誘われたのである。相手は静かにそれを聞いた。彼は微笑すら

しなかった、或いは彼が語るのを妨げなかった。彼は相手に語らせ聞いた。彼は沈黙したが、ただ彼が約束したのは（それは要求されたことなのであるが）、語られたことを忘れないということだった。そのようにして時が過ぎていった。そして前者はこれら全てのことをずっと以前に忘れてしまっていた。これに反して後者はそれを忘れていなかった。然り、もつと異常なことを考えて見よう。前者が霧囲気の瞬間において表明し、ああ、その後いわばみずから放棄してしまった思いつきに、後者は攪乱され真面目に努力を重ね、自分の生活をそれとの関係で築いていった、そういう場合のことを考えてみよう。その人の記憶は何ら変わることもなく、あの瞬間の言葉の一語一語がもろさず留められていることをきわめて明らかに立証するものであったが、そうした記憶の確かさのもつ重みはいかばかりであったらう！ (*ibid.*, S. 262f.)

ここで大谷長は「キエルケゴールのレギーネ 関係の一場面の余韻或いはカデンツァ」と註を付けている。「ここで言われる「もつと異常なこと」とはどういうことであるか。誰かがその場で表明し、いわば相手に手渡した考えに、その相手側は自分自身もなげうって動かされ、その考えに従って自分の人生を形成するということである。恐らくレギーネが一場の気分の中で言ったことを、終生忘れずに、その言葉、考えに従って自分の人生を作り上げていったキエルケゴール！ そのような記憶の重みについてキエルケゴールはここで述べているのである（あなたの父と神の名に賭けて私を捨てないでほしい！ という言葉を想起してもよいであらう）。

ああ、この人間の心よ、秘密に閉ざされたお前の困いの内には、他のだれにも知られることなしに——といってもそれは最悪のことだとは言い切れないだろうが——、時

には当人にさえもまったく知られることなしに、隠しもつことができるような何かがあるというのか！ ほんの少しでも歳を取れば、たちまちにしてまるで墓場のようになってしまう、この人間の心よ！ この墓地の中に眠り、忘却の内に眠るものは、誓約、志望、決意のもろもろであり、計画の全体及び断片であり、神はその何たるかを知っておられる——と、まさにそのように我々人間は語るのである。……神は君が忘れた最小のことに至るまでそれを知っており、君は君の記憶に対しては変わったことを知っており、それを彼は不変に知っている。彼はそれが何か過ぎ去ったものであるかのようにそれを思い出しすらしめない、否、彼はそれが今日であるかのようにそれを知っている。彼はこれらの願望、決定、決断（決心）の何かに関して、いわばそれについて彼に対して語られたのかどうかを知って——そして彼は永遠に不変であつたとして永遠に不変である。ああ、もし他の人間の記憶が或る者に対して重荷になることがあるなら——そうだとして、しかしそれはそんなに充分に信頼すべきものではない、そして兎も角もそれは永遠に続くことは決して出来ない、私は所詮この他の者と彼の記憶から自由になる。だが、全智者、そして永遠に不変の記憶、それから君は免れはしない、永遠においては免れることは最も少ない。恐ろしいことだー（*ibid.*, S. 263.）。

ここに我々は、キエルケゴールのレギーネに対する最終的な別離の言葉を聞くことが出来る。キエルケゴール レギーネ関係においては、レギーネが言ったことをキエルケゴールが永く記憶して、その言葉が人生の歩みすら決定したと言つことが出来る。それはレギーネに取つては、重荷となる。しかし、そうした記憶の在り方において、やはりキエルケゴールが正確であつたかどうか

という問題は残るのである。しかし、このような人間の問題と神の記憶とはまったく質的に異なっている。それは唯識で言えば意識と阿頼耶識の違いである。神の不変性を前にしては、二人とも共にその思惑（思忖）存在を深く懺悔するより他はないのである。そしてそのことにおいて、まさに永遠の結び付きを受取り直すことも可能となるのである。

実際、永遠に変わらずして彼に対して全てのものは永遠に現前しているのである。永遠に同じように現前しているのである。否、永遠に不変的な彼にとつては全てが永遠に現前的であり、永遠にして現然的である。いかなる変転（回転）の影も、朝と夜の、青年時と老年、忘却と容赦（弁解）、のそれも彼を変転させない。否、彼にとつてはいかなる影もないのである。言われるように、もし我々が（たちまちにして消え去る）影であるなら、彼はその永遠の不変性において永遠の明らかさである。もし我々が急ぎ行く影なら——私の心（魂）よ、君によく気を付け給え（お前は十分警戒すべきである）、というのは、君が欲しようが欲しまいが、君は永遠へ、彼のもとへ急ぎ行くのである。それゆえに彼は清算をするのみならず、彼が清算なのである。我々人間は、清算のために恐らく長い時間がかかり、そして清算が出来上がるためには克服しがたい多量の詳細が入るかのようにして清算しなければならぬ（決算が成就され得る前に、恐らく処理出来ぬ程多くの細やかな手続きがあるとかいうようにしてその決算を果たすに違いない）。ああ、我が魂よ、決算（清算）はあらゆる瞬間に実現されているのである。なぜなら彼の不変的な光明が決算であり、それはどんな些細なものの中にも（最小のものの中にも）完備されており、又それは、すでに私が忘れてしまったも

のも決して忘れず、実際にあったことを違って記憶する私の場合とは異なる永遠の不変者たる彼によって保管されているからである (*ibid.*, S. 264.)

## 八 平安と浄福の場所

この思想には又、平安と浄福があるということも本当である。もし君がこの人間世界の、あらゆるこの時間的で現世的な可変性と変換に飽き、君自身の不安定さに飽きて、休みそして休み終えるために、君が君の疲れた頭、君の疲れた思い、君の疲れた心を休ませる得る場所を望むことがあるなら、おお神の不変性の中に休息がある！ (*ibid.*)

ここに第二のイタリック体がある(第三版)。ここで大きな分割があるのである。すなわち神の不変性は畏れとおのきの対象であると同時に、又真の安らぎが成就する所でもあるのである。キエルケゴールはここに *Sted (Place)* という言葉を使っている。真実の場所、人間が真実そこに休息を実現できる場所とは何処であるのか。それは神の不変性の思想の内にあるのである。

しかしながら、この思想を真に受け入れるには、我意の否定が必要である。ここでこの小論も最初の問題に戻るのである。神の不変性の受容と我意の否定(金子大栄は「念仏は自我崩壊の呼び声である」といわれた)は同時に起こるのである。又我意の否定は我意の自覚を通して以外にはありえない。親鸞のいう「二種深信」の構造がはっきりと見て取れるであろう。「罪悪深重・煩惱熾盛」の自覚こそが真の平安への飛躍を可能にするのである。平安と浄福の場所へ至ることは、かくして非常に弁証法的である。

またキエルケゴールは興味深いことをここで述べている。それは神の不変性の思想によって安らぎの場所に住まうには、常に神の不変性を思い念じなければならぬというのである。一旦神との関係が（神との意志疎通が）生起して、それでおしまいという訳ではないのである。人間存在は常に思惑（思忒）存在である。それはこの心身のある間は持続するものである。私は他力信仰の現実性の特徴を常々 *schon+noch nicht* 「既に」と「未だ……ない」との相即で考えてきた。「ここから」「常に思つ」ことの重要性が生じるのである。「このことは浄土教では「執持すること」の重要性として考えられている。執持とは「とりたもつ。常に堅く念頭に把握して忘れざること」をいふ。小経（『阿弥陀経』）の「執持名号」或いは覚如の「執持抄」等、このようなところから出てくる言葉である。

さらにこの思想が憩いの場となることを、次のように述べている。

幸福な住居を持っている者（見張る者）は言つ、私の住居は永遠に保護されている、私は神と神の不変性の中に憩つ、と。その憩いを、君自身以外の誰も君に妨げない。もし君が不変の服従の中で全く服従するようになり得るなら、君はどの瞬間にも、重い物体が地上に降下するのと同じ必然性で、或いは軽い物が天に向かって昇るのと同じ必然性で、自由に神の内に憩うだろう。さらに付け加えるならば、一切をただそれが為すに任せて回転させなさい。（そしてその他に関しては、全てのものが、それがなすように変換せしめられよう）（*ibid.*, S. 265.）

ここでいくつかの言葉について触れておきたい。(1)まずキエルケゴールが「幸福な住居」としていることである。Hjem (Heimat) の概念は、恐らく「如来の家」の概念とも通じるであろう。或いはささか異質な改変を為した形で、ハイデガーの Heimat にも通じるであろう。(2)又 *H* という言葉がここに出てくる。わずか一語ではあるが、キエルケゴールの自由概念の成立する場を表現して余りあるのではなからうか。それは神の不変性に不変に服従するところに成就するのであり、しかもその際には自我が崩壊していなければならない。又(3)「一切をただそれが為すに任せて回転させなさい」という言葉がある。ここは非常に重要な箇所である。一切が成るよつに成る縁起の世界と通じる。英訳では“Then let everything else change, as it does.”となっている。諸行無常そのものに成り切るところに(それは徹底した我意の否定を当然伴つ)、諸行無常に振り回されない平安な境地が(場所が)現成するのである。

さて、最後にキエルケゴールはこの平安と浄福の場所、憩いの家について、さらに「泉」の比喻をもって記しているので、それを見ておきたい。

聴衆者諸君！ 今こつこつしている間にも、時間はみるみる過ぎていく。そしてこの談話も又そうである。もし君自身に求めるところがないなら、やがてこのひと時も又忘れ去られるであろう。談話も又そうである。そして君自身に求めるところがないなら、やがて神の不変性の思想も又可変性の内に忘れ去られるであろう。しかしながら、それについて神には、そう不変者である彼には何の責めもない！ しかるにもし君が忘却という罪を犯すことがなければ、この思想の中で君は生涯に渡って、否永遠に十分庇護されるであろう。砂漠(荒野)の中での一人の孤独な者を考えて見たまえ。太陽の熱

で殆ど焼き尽くされ、衰弱しつつ彼は泉を見出す。ああ、何たる快い涼味（涼感）だ  
 なる。 (ibid.)。

こうしてキエルケゴールは泉の発見を不変なる神の発見に譬えている。そこには偽りのない、真実の涼感がある。親鸞の浄土にも泉の意義があつて、悲願はたとえば「涌泉（ゆせん）のごとし」（『教行信証』）と言われているのが想起される。ここに現生不退、正定聚の立場が成立するのである。キエルケゴールにおいても最初の神との出会い（回心）がここに考えられている。さて、次にこの涼味の受取り直しについてであるが、次のように述べられている。少し長くなるが、最後に引用しておこう。受取り直しは、「一人の人間の胸の内に」実現するのであつて、それがここでしっかりと確認されている。

彼の人生は、彼が考えていたとは全く別の展開をした。彼はある時正道を踏み外して、広い世界へ引き裂き込まれた。多くの年月の後で彼は帰ってきた。その時最初に彼の頭をよぎったのは泉であつた——しかしそれは無かつた。それは涸渇していた。一瞬間、彼は悲しみの内に沈黙して立っていた。次いで彼は気を取り直し、そして言った。本当に私は君の讚美のために言った一言もやはり撤回しない。それは真実であつたし、全てだ。そして君が存していた間に君の美味な涼味を讚美したのだ。ああ、愛すべき泉よ、今君は消え去つたが、一人の人間の胸の内には不変性があるということが真実であることを示すために、私にお前を讚美させて欲しい。……しかしあなた、おお神よ、あなた不変なる者、あなたは常に不変に見出されます。そして常に不変に見出さ

れます。何人も、生においても死においても、あなたが見出されずあなたが存しない程遠く旅する者はありません。あなたは実際至る所にあられます。——地上の泉はそのようには存しません。泉はただ個々の場所にのみ存します。さらに——無限に確かなこと！——あなたは言つまでもなく泉のようは一箇所には止まっておられません。あなたは一緒に旅をされるのです。ああ、そして誰もあなたへ帰路を見出すことが出来ない程遠くへ正道を踏み外す者はありません (*ibid.*, S. 266.)<sup>(7)</sup>

(やましたひとと)

## 注

- (1) S. Kierkegaard: *Guds Uforanderlighed*, S. V. 3 udg., Bd. 19, Gyldendal, 1964, S. 256. なおキェルケゴールのテキストは『全集第三版』を用い、引用は括弧内に巻数と頁数を示した。
- (2) 思惑という言葉に括弧付けで、思粹と記していることについては、拙著『宗教的実存の展開』創言社、二〇〇〇年、六頁以下を参照。
- (3) 『真宗聖教全書』一、大八木興文堂、一九六七年、二七〇頁参照。
- (4) S. Kierkegaard: *Guds Uforanderlighed*, Bd. 19, S. 259.
- (5) 道元『正法眼蔵』水野弥穂子校注、岩波文庫、一九三三年、五四頁。
- (6) S. Kierkegaard: *Guds Uforanderlighed*, Bd. 19, S. 260.
- (7) 本論文は、二〇〇〇年秋のキェルケゴール協会講演会での話が元となっている。